

次世代育成に関する母性意識調査 —看護学科と幼児教育学科の1年次生を対象に—

岡 宏美・貞岡 美伸・上山 和子

母性・小児看護学

An Examination into Students' Motherhood Consciousness about Parenting Next Generation
—To Freshmen in Nursing Department and Early Childhood Education Department—

Hiromi OKA Minobu SADAOKA Kazuko UEYAMA

(2004年11月10日受理)

母性に関する環境が急激に変化しつつある現在、次世代育成に関する母性意識について学生がどのように考えているのかを知る目的で、看護学科と幼児教育学科の1年次生を対象に、質問紙調査を行った。その結果、

1. 母性意識の平均値は全体として幼児教育学生に比べ看護学生の方が高かった。
2. 両学生間で有意差のみられた項目は、「3. 女性特有の天分や役割の総称」「12. 保護、心配、世話、いたわりなどの行動様式」であった。
3. 評定段階で肯定する度合いの高かった項目は、「1. 子どもとの関係を築き人間として育てていく力」であった。評定段階で否定する度合いの高かった項目は、「16. 命も惜しまない母親の性質」であった。
4. 各学科ともそれぞれの傾向性が見られた。看護学生は母性を妊娠や出産として具体的に認識しやすく、幼児教育学生は育児行動の中に母性を感じている傾向にある。
5. 母性意識の全項目の平均値の上昇を考慮した授業内容の検討を考えていく。

はじめに

近年は幼児虐待が表面化し、毎日のように報道されている。少子少産であるにもかかわらず、子どもを育てにくい環境が形成されつつあると感じる。今年6月に発表された、平成15年度合計特殊出生率は、過去最低の1.29を示し、予想された事態とはいえ、社会的な影響は大きいと考えられる。次世代を育成していく上で、様々な問題が起きている現在の状況を考えたとき、母性が十分に発揮されていないように考える。

母性とは、広辞苑によると「女性が母として持

っている性質。また母たるもの」¹⁾と書かれており、母親や妊娠・分娩・哺育といった限定された生物学的な、狭義としての母性が一般的である。しかし、現在ではその意味を広く捉え、母性が女性のライフサイクルすべてにおいて存在するものであり、身体的側面と心理・社会的側面を統合した特性として考えられている。その母性を次世代育成のために発揮できるようにしなければならないと考える。次世代の育成を担う者として、結婚・妊娠・分娩・育児を経験していく学生が、いま考える「母性」とは何かをとらえること、将来「母性」や「育児」を専門職として支えていく看護学科学

生と幼児教育学科学生の母性意識を明らかにすることを目的として考察する。

また本稿では、看護学科学生よりも育児や保育に関心のある幼児教育学科学生の方が、母性意識が高いのではないかと考える。

I 研究方法

1. 調査対象：3年制の短期大学の看護学科1年次生62名（以下看護学生）、2年制の短期大学の幼児教育学科1年次生53名（女子51名、以下幼児教育学生）、うち女子のみを対象とした。主として看護学生について検証し、対象群を幼児教育学生とした。
2. 調査時期：平成16年5月（看護学科）、平成16年6月（幼児教育学科）
3. 調査方法：次世代に関する調査として、5項目の尺度①伊藤²⁾の「M-H-F scale」②松村³⁾の「母性に関する認知の質問項目」③花沢⁴⁾の「胎児感情尺度（改訂版）」④松村³⁾「乳幼児に対する関わり意識の質問項目」⑤宮原ら⁵⁾「世代間継承」を用いて質問紙調査を行った。今回はこれらの中の「母性に関する認知の質問項目」を取り上げた。
4. 調査内容：測定用具は、松村³⁾が作成した母性に関する認知（16項目）を用いた（表1）。各項目について、「全くそう思う」「そう」「どちらでも」「違う」「全く違う」の5件法で回答するもので、各々5～1点となる。母性に関する認知16項目は、①生理的側面（表1のNo2、3、5、7、9、13、15、16）、②心理的側面（表1のNo4、6、10、11、14）、③行動的側面（表1のNo1、8、12）で構成されている。なおこの16項目は妥当性、信頼性、一元性について確認できた測定用具である。
5. 分析方法：SPSS（11.0j for Windows）により、t検定を用いて統計処理を行った。なお、有意水準は $p < .05$ とした。さらに、肯定群と否定群に分けて比較した。
6. 倫理的配慮

調査は無記名とし、調査への参加は自由意志であり、データは統計的に処理され目的以外には使用しないこと、データから個人を特定しないこと、質問に答えなくても成績には影響しないこと、調

査に対して拒否の自由があることを口頭と文書で説明し、これらについて同意を得られた学生のみ提出してもらい、協力を得た。

II 結果

質問紙の回収率は看護学科61名（98.3%）、幼児教育学科43名（84.3%）、有効回答率は、看護学科が60名（98.4%）、幼児教育学科40名（93.0%）であった。

対象者の年齢について、看護学科は、18歳から22歳が96.7%、22歳から30歳が1.6%、30歳以上が1.6%であり、幼児教育学科では全員が18歳から22歳であった。

母性に関する認知についての調査結果を、「看護学生と幼児教育学生のそれぞれの項目について平均値を比較」「看護学生と幼児教育学生の項目間の有意差」「肯定群と否定群での項目間の比較」の順に記述する。

- 1) 看護学生と幼児教育学生のそれぞれの項目について平均値を比較

母性に関する認知の各項目について、平均値を検出した（表2）。それぞれ看護学生と幼児教育学生の平均値の高い3項目と、低い3項目を比較した。まず、看護学生の平均値の高い3項目は、高い順から「1. 子どもとの関係を築き人間として育てていく力 $=4.10 \pm 0.096$ 」、「10. 子どもとの関わりから育つ愛情や慈しむ気持ち $=4.07 \pm 0.081$ 」、「3. 女性特有の天分や役割の総称 $=3.93 \pm 0.140$ 」であった。また、幼児教育学生の平均値の高い3項目は、「1. 子どもとの関係を築き人間として育てていく力 $=4.03 \pm 0.110$ 」、「10. 子どもとの関わりから育つ愛情や慈しむ気持ち $=3.90 \pm 0.106$ 」、「4. 保護を求めている子どもを受け入れる優しさ $=3.76 \pm 0.091$ 」の順であった。

次に、平均値の低い3項目を比較した。看護学生で最も低い項目は「16. 命も惜しまない母親の性質 $=3.13 \pm 0.155$ 」、であり、次いで「8. 子どもを育てようとする傾向性で誰もが持つ $=3.30 \pm 0.145$ 」、「15. 無条件で子どもを愛する母親の性質 $=3.31 \pm 0.143$ 」の順であった。また、幼児教育学生で最も低い項目は「16. 命も惜しまない母親の性質 $=2.78 \pm$

表1 母性に関する認知の質問項目

【質問3】あなたが考える「母性」とは？ 当てはまる番号に○印をお付けください。	全く 違っ つ	違 う	ど ち ど ち も	そ う	全 く そ う
1. 子どもとの関係を築きながら人間として育てていく力である	1	2	3	4	5
2. 妊娠、出産、授乳に関わる機能である	1	2	3	4	5
3. 出産し愛情をもって育児にあたる女性特有の天分や役割の総称である	1	2	3	4	5
4. 自分の保護を求めている幼く小さい子どもを受け入れる優しさである	1	2	3	4	5
5. 女性特有の母なる性質、生殖と子育てに関する性質である	1	2	3	4	5
6. 自分以外の命に対する慈しみの心、弱い存在へのいたわりである	1	2	3	4	5
7. 子どもをもつ女性が子どもとの関係の中で発揮する育児能力である	1	2	3	4	5
8. 子どもを育てようとする傾向性で誰もがもっている	1	2	3	4	5
9. 産む性として自然で豊かなもので素晴らしい女性の特権である	1	2	3	4	5
10. 子どもとの関わりから育つ愛情や慈しむ気持ちである	1	2	3	4	5
11. 子どもを包み保護する精神機能で誰もがもっている	1	2	3	4	5
12. 具体的には保護、心配、世話、いたわり、接触などの言葉で表現される行動様式のことである	1	2	3	4	5
13. 社会的、生理学的、感情的な統一体としての母の子に対する関係を示すものである	1	2	3	4	5
14. 自分の子どもだけでなく、すべての子どもに対する愛情でわが子意識に限らない	1	2	3	4	5
15. 子どもが可愛いのはあたりまえで、無条件で子どもを愛する母親の性質のことである	1	2	3	4	5
16. 子どものために命も惜しまない母親の性質のことである	1	2	3	4	5

0.145]、次に「8. 子どもを育てようとする傾向性で誰もが持つ=2.95±0.152]、「11.子どもを包み保護する精神機能で誰もが持つ=3.02±0.162]であった。

2) 看護学生と幼児教育学生の項目間の有意差

看護学生と幼児教育学生の各項目間での差を見たところ、16項目中2項目について有意な差が認められた (p<.05)。「3. 女性特有の天分や役割の総称 (p=0.048)」、「12.保護、心配、世話、いたわりなどの行動様式 (p=0.046)」である (表2)。両項目ともに平均値は看護学生のほうが高かった。他の項目については有意な差は見られなかった。

3) 肯定群と否定群での項目間の比較

評定段階から肯定群<全くそう・そう>と、否定群<全く違う・違う>に分けて結果を比較した (表3)。看護学生と幼児教育学生で肯定群の内容を比較した結果、「1. 子どもとの関係を築き人間として育てていく力」は看護学生86.9%、幼児教育学生87.5%で各学生とも最も高い肯定度を示した。次いで「10. 子どもとの関わりから育つ愛情や慈しむ気持ち」は看護学生83.7%、幼児教育学生77.5%、「4. 保護を求めている子どもを受け入れる優しさ」は看護学生73.3%、幼児教育学生68.3%であり、この順で肯定度が高い結果となった。そして「7. 女性が子どもとの関係で発揮する育児能力」は、

看護学生57.4%、幼児教育学生60.9%であり、「1. 子どもとの関係を築き人間として育てていく力」の2項目のみが看護学生よりも幼児教育学生の肯定度がわずかに高かった。また、肯定度が低い項目は「16. 命も惜しまない母親の性質」で看護学生41.6%、幼児教育学生17.5%であった。そして「12. 保護、心配、世話、いたわりなどの行動様式」は、看護学生は55.7%で高く、幼児教育学生は36.6%で低かった。この2項目については、看護学生と幼児教育学生で差がみられた。

次に、否定群は両学生ともに全体として示す値が低かった。その中でも0%を示した項目があり、看護学生は「10. 子どもとの関わりから育つ愛情や慈しむ気持ち」、幼児教育学生は「4. 保護を求めている子どもを受け入れる優しさ」であった。否定度の高かった項目は「16. 命も惜しまない母親の性質」で看護学生31.7%、幼児教育学生32.5%であった。ほとんどの項目について、幼児教育学生の否定する割合が高く、「4. 保護を求めている子どもを受け入れる優しさ」「9. 産む性、素晴らしい女性の特権」

「13. 社会的、生理学的、感情的な統一体としての母と子」「14. わが子だけでなくすべての子どもに対する愛情」の4項目については、看護学生の否定する割合が高かった。否定群は、看護学生と幼児教育学生の項目間の明らかな差は認められなかった。

Ⅲ 考察

母性に関する認知の実態調査から

全体の平均値の比較として、幼児教育学生よりも看護学生の平均値が高かったことが分かり、このことからわずかではあるが看護学生の方が、母性に関する認知については意識が高いものと考えられる。これは、幼児教育学生は「母性」よりも「育児」に関心が高いと考えられ、具体的な「育児行動」のなかに「母性」を感じているためではないかと思われる。それに対して、看護学生は「母性」について考える時に、妊娠・出産をイメージしやすく、一般の若者よりもより具体的に「母性」

表2 母性に関する認知

質問項目	平均値		標準偏差		t 値	有意確率 (両側)
	看護	幼教	看護	幼教		
1.子どもとの関係を築き人間として育てていく力	4.10	4.03	0.746	0.698	0.503	0.616
2.妊娠、出産、授乳に関わる機能	3.72	3.54	0.885	0.869	1.015	0.313
3.女性特有の天分や役割の総称	3.93	3.49	1.087	1.098	2.010	0.048*
4.保護を求めている子どもを受け入れる優しさ	3.88	3.76	0.885	0.582	0.871	0.386
5.女性特有の母、生殖、子育てに関する性質	3.62	3.34	0.934	1.015	1.418	0.160
6.自分以外の命に対する慈しみの心	3.57	3.32	0.884	0.960	1.366	0.176
7.女性が子どもとの関係で発揮する育児能力	3.57	3.51	0.974	1.075	0.294	0.769
8.子どもを育てようとする傾向性で誰もが持つ	3.30	2.95	1.131	0.959	1.646	0.103
9.産む性、素晴らしい女性の特権	3.38	3.20	1.035	0.928	0.926	0.357
10.子どもとのかかわりから育つ愛情や慈しむ気持ち	4.07	3.90	0.629	0.672	1.242	0.218
11.子どもを包み保護する精神機能で誰もが持つ	3.38	3.02	1.106	1.037	1.663	0.100
12.保護、心配、世話、いたわりなどの行動様式	3.54	3.20	0.808	0.872	2.022	0.046*
13.社会的、生理学的、感情的な統一体の母と子	3.36	3.17	0.876	0.704	1.209	0.229
14.わが子だけでなくすべての子どもに対する愛情	3.57	3.39	0.939	0.771	1.079	0.283
15.無条件で子どもを愛する母親の性質	3.31	3.07	1.119	1.104	1.063	0.291
16.命も惜しまない母親の性質	3.13	2.78	1.200	0.920	1.687	0.095

* $p < .05$

表3 肯定群と否定群

質問項目	肯定群		否定群	
	看護学 生	幼児教育 学生	看護学 生	幼児教育 学生
1.子どもとの関係を築き人間として育てていく力	86.9	87.5	4.9	5.0
2.妊娠、出産、授乳に関わる機能	70.0	53.7	8.3	12.2
3.女性特有の天分や役割の総称	70.0	56.1	13.4	19.5
4.保護を求めている子どもを受け入れる優しさ	73.3	68.3	6.7	0
5.女性特有の母、生殖、子育てに関する性質	57.4	48.8	8.2	19.5
6.自分以外の命に対する慈しみの心	55.7	46.3	9.8	17.1
7.女性が子どもとの関係で発揮する育児能力	57.4	60.9	14.7	19.5
8.子どもを育てようとする傾向性で誰もが持つ	44.3	22.5	26.2	30.0
9.産む性、素晴らしい女性の特権	54.1	39.0	21.3	19.5
10.子どもとのかかわりから育つ愛情や慈しむ気持ち	83.7	77.5	0	2.5
11.子どもを包み保護する精神機能で誰もが持つ	46.6	24.4	23.3	29.3
12.保護、心配、世話、いたわりなどの行動様式	55.7	36.6	8.2	19.5
13.社会的、生理学的、感情的な統一体の母と子	45.9	31.7	13.1	12.2
14.わが子だけでなくすべての子どもに対する愛情	52.4	41.4	13.1	9.8
15.無条件で子どもを愛する母親の性質	41.0	36.6	22.9	31.7
16.命も惜しまない母親の性質	41.6	17.5	31.7	32.5

(%)

を捉えているのではないかとと思われる。次に、平均値の高かった項目について、看護学生と幼児教育学生を比較したところ、上位の2項目については同じ結果となった。この2項目の共通点としては、どちらも実際に乳児に接することや育児を行っていくことで「母性」が成長、発展していくと考えている点である。よって、学生は全体的に、「母性」とは母親になってはじめて出現し、発揮されるものという認識を強く持っていることわかる。また、有意な差が認められた「3. 女性特有の天分や役割の総称」「12. 保護、心配、世話、いたわりなどの行動様式」ともに、看護学生の平均値が高く、看護学生が考える母性とは、女性としての性役割を強く意識しているのではないかと考える。これは、生物学的な性差に看護学生がより強い認識をもっているからではないかと思われる。

次に、評定段階での肯定群の項目内容を検討すると、肯定度の高い項目に関しては、看護学生と幼児教育学生ともに、「母性」を子どもと関わる中で発揮され、発達していくものと認知しているこ

とが分かる項目内容であった。両者で肯定度に差のあった項目「16. 命も惜しまない母親の性質」については、両者とも肯定の度合いが低く、特に幼児教育学生では目立って低値を示していた。学生はまだ、乳幼児に関わる経験が少ないため、乳幼児の世話について具体的にイメージできず、自己犠牲に関する意識が低いのではないかと考えられる。両者に明らかな差のみられた項目は「12. 保護、心配、世話、いたわりなどの行動様式」であり、看護学生の肯定度が高いのは、項目内容が看護や介護をイメージさせるためではないかと思われる。否定群からは、否定度が0%を示す項目があり、両学生の項目内容が分かれた。看護学生は「10. 子どもとの関わりから育つ愛情や慈しむ気持ち」の否定度0%であり、母と子の間での関係から想像する母性意識となっていることが分かる。幼児教育学生は「4. 保護を求めている子どもを受け入れる優しさ」の否定度0%であり、弱者である子どもを擁護する意識を母性と考えていることが分かる。両学生の否定度が高かった項目は「16. 命も惜しま

ない母親の性質」で、肯定度も低かった項目である。母性意識としては、自己犠牲感は学生の中にはあまりないように感じられる。大概⁶⁾は女性の社会進出に伴って未婚の女性も増加し伝統的母親役割に対する意識も薄れてきていると推測される。さらに、出生率の低下により学生自身の兄弟が少ないことや成長過程で乳幼児と接する機会も少ないことが影響していると思われると述べており、同じ傾向がこの調査でも現れていると言える。

調査対象として、専門知識を学ぶ前の1年次生を選択し、調査を行ったが、専門職を目指し入学してきたこともあり、各学科で学生の傾向性が現れた結果となった。これから専門分野を学んでいく学生は講義や実習を通して、母性意識が高まってくるのが予想されるが、今回の結果を踏まえて、母性意識の低い項目については意識を高めていくよう促していく必要があると考える。今回の調査で現代の若者の考える母性意識の傾向性も見えてきた。肯定度が低く、否定度が高かった「15. 無条件で子どもを愛する母親の性質」「16. 命も惜しまない母親の性質」の2項目が示す、自己犠牲感などの伝統的母親役割は、学生が考える母親像の中のイメージとしては薄いと思われる。しかし、この2項目の内容が示す母性意識は、母性とは何かを考えるうえで根底にあるものと考えられる。同じく「8. 子どもを育てようとする傾向性で誰もが持つ」「11. 子どもを包み保護する精神機能で誰もが持つ」の2項目も肯定度が低く、否定度が高かった(表3)。これは、「母性」とは元から備わっている性質ではなく、徐々に養っていくものだと考えていると思われる。

今回の調査で、学生の感じる「母性」が子どもとの関わりの中で現れる感情や行動であるとの意見が多いことがわかった。松村⁷⁾は母性の本質は生物学的な存在としての女性の形態や機能よりも母性行動を操る精神、つまり心理学的、文化・社会的な存在としての女性の子どもの対する意識、感情、愛に求めなくてはならないと述べていることから、子どもに対する愛情などの精神的な機能を学生に求めていく必要があると言える。これらのことから、実際に子どもと接することで「母性」としての精神機能がより発達していくのではない

かと考える。そのためには、青年期である短大生よりも一段階前の思春期から「母性」を育てる工夫も考えていくことが必要ではないだろうか。思春期は妊娠・分娩・育児を体験する前の段階であり、身体的に大きな変化を経験し(第二次性徴)、徐々にアイデンティティを形成していく時期でもある。母子保健の理念は、思春期から妊娠・出産を通して母性・父性がはぐくまれ、児童が心身ともに健やかに育つことを目指すものである⁸⁾。と定義され、思春期からの母性の育成の重要性が述べられている。このことから、思春期は母性を発達させていく上で大切な時期と考える。最近では、中・高校生が保育所を訪問し、乳幼児の世話を体験する授業もあり、「母性意識」の育成のための取り組みもすすんでおり、早い時期からの「母性」育成の取り組みが望まれている。

今回、調査の対象とした看護学生と幼児教育学生はともに、乳幼児に接する機会として臨地実習があり、学生自身が妊娠や出産・育児を経験する前に子どもと関わる事が出来る。この機会を利用して、「母性意識」が触発され、発達していくように講義や実習を進めていくことが重要であると考える。さらには、実習での「母性」育成をより有効なものにするために、実習前からの工夫も必要と思われる。

IV 結論

1. 母性意識の平均値は全体として看護学生の方が幼児教育学生に比べ高かった。
2. 両学生間で有意差のみられた項目は、「3. 女性特有の天分や役割の総称」「12. 保護、心配、世話、いたわりなどの行動様式」であった。
3. 評定段階で肯定する度合いの高かった項目は、「1. 子どもとの関係を築き人間として育てていく力」であった。評定段階で否定する度合いの高かった項目は、「16. 命も惜しまない母親の性質」であった。
4. 各学科ともそれぞれの傾向性が見られた。看護学生は母性を妊娠や出産として具体的に認識しやすく、幼児教育学生は育児行動の中に母性を感じている傾向にある。

5. 母性意識の全項目の平均値の上昇を考慮した授業内容の検討を考えていく。

V 今後の課題

今回の調査では、1年次生を対象としたものであり、今後は講義を終了した2年次生、実習を終了した3年次生に調査を実施し、母性意識の変化に講義や実習がいかに関与しているかを明らかにしていきたい。そのうえで、母性意識を高められるような授業内容を考えていきたい。

引用参考文献

- 1) 新村出編：広辞苑、第5版、岩波書店、1998
- 2) 伊藤裕子：M-H-F scale、1978
- 3) 村松恵子：乳幼児を子育て中の母と父の母性意識の構造、母性衛生、2004、45 (1)、98-110、
- 4) 花沢成一：対児感情尺度 (改訂版)、1992
- 5) 宮原忍他：少子社会における個人および社会の養育力に関する母子保健学的研究 (第二報) 次世代育成に関するアンケート調査報告、日本子ども家庭総合研究所紀要、第38集：151-163、2000
- 6) 大槻優子：女子看護学生の母性意識の変化—1年次後期から3年次母性看護学実習終了までの経年的変化—、2004、45 (1)、118-125
- 7) 松村恵子：母性意識の構造と発達、真興交易医書出版部、1999
- 8) 財団法人母子衛生研究会編：わが国の母子保健—平成16年—、母子保健事業団、2004

Summary

The authors performed questionnaire targeted at freshmen of nursing department and early childhood education department. The purpose of this investigation is to comprehend how the present students think about motherhood and parenting next generation in the time when our consciousness of motherhood is changing rapidly. We have found the following things:

1. The students in nursing department scored higher average than those in early childhood education department regarding motherhood consciousness.
2. Significant differences are seen in the categories, 3) motherhood as a general term for gifted roles special to female, and 12) motherhood as a behavior pattern of protection, worries, care and nurturing.
3. The item that most students acknowledged as motherhood is 1) the strength with which mothers build relationship with and bring up their children. The item that least students acknowledged as motherhood is 16) the nature of mother who dare to cost her life.
4. Apparent tendencies are seen in answers from each department. The nursing students tend to recognize motherhood physically as pregnancy and delivery. On the other hand, the early childhood education students tend to feel motherhood in child care behaviors.
5. The authors need to review the contents of the lectures to higher the scores of each item.